

## 特別支援学級のための音楽鑑賞教材研究 I

～音楽授業観察による指導目標の考察～

宮下 茂（長崎大学教育学部）

### I はじめに

筆者は、平成 19 年 2 月 23 日に長崎大学教育学部附属養護学校（現特別支援学校）で開催された公開研究発表会に於ける中学部指導助言者の任を得た。そして指導助言に先立ち、同年 1 月 29 日から 3 回に亘り同校中学部の藤田美穂子教諭による音楽授業の観察を行った。（註 1）

それらの観察により、指導助言者として特別支援学校での音楽授業の内容に興味を抱いたと同時に、演奏家としても同様の興味を抱いた。そして筆者の指導活動や演奏活動を特別支援学校の生徒に役立てることや、どのようにすれば役立てることができるか等を考えるようになった。

その後も現在までの約 1 年間に亘り、同校の音楽授業観察を行ってきた。

また平成 19 年 6 月 6 日から 3 回に亘り、長崎県立盲学校幼少部に於いて音楽授業を行う機会を得たことから、同年 5 月 24 日に同校幼少部の牟田秀子教諭による音楽授業の観察も行った。（註 2）

本論分では、これまで筆者が行ってきた授業観察の記録の中から事例を挙げ、音楽授業に於ける目標として、筆者の考えを明らかとする。

### II 特別支援学校及び盲学校の授業観察

これまでの観察内容から、生徒の特徴として捉えられたいくつかの事例を、指導内容と生徒の反応を基に考察し、以下にまとめる。

#### （事例 1）段階的なリズム学習での生徒の反応について

ここでは様々なリズムを感じることを目標とした授業に於ける、生徒の反応を例として学習内容と指導内容を考察する。

この授業では様々な音楽に合わせた身体表現を基に、リズム（拍子）の学習を行っていた。それを 3 回の連続した授業により、段階的に学習していた。

各回の指導内容と生徒の反応の様子については、【表 1】にまとめる。

1 回目の授業では、ほとんどの生徒が拍子の違いを理解できず、2 拍子を「楽しい行進」、3 拍子を「行進+別の動作」として反応し、生徒たちは拍子の違いを感じ取っていなかった。そこで 2 回目の授業では、2 拍子のみを取り上げ、2 拍目の強調を繰り返し学習していた。すると 3 回目の授業では、生徒たちが「歩くリズム」の規則的な流れを「2 拍子」として認識し始め、3 拍子も「行進（2 拍子）+別の動作」ではなく、本来の「3 拍子」の認識が見られた。

これらの観察内容から、一度に多くの内容を盛り込まない、段階的な学習内容、単純で明快な筋道の立った指導内容の必要性とその効果が分かった。

【表1】段階的なリズム学習での生徒の反応

|            | 指導内容  | 生徒の反応   | 分析等  |
|------------|---|---|--|
| 拍子の学習(第1回) | [指導1]ピアノ演奏に合わせた、異なる拍子での表現学習   |   |  |
|            | ① 2拍子(アイダの行進)＝足踏み運動   | ① 2拍子に合わせて楽しそうに足踏みを繰り返す。  | ① 2拍子の音楽に合わせて身体表現できる。  |
|            | ② 3拍子(エーデルワイス)＝横へのステップ運動(2拍)と手拍子(1拍)の組み合わせ                                | ③ 元気よく横にステップを踏み、3拍目に楽しそうに手を叩く。  | ② 3拍子の音楽に合わせて身体表現できる。  |
|            | ④ 4拍子(ピリープ)＝横へのステップ運動(左に2拍、右に2拍の繰り返し)                                     | ⑤ 元気よく左右にステップを繰り返し踏み踏む。   | ③ 4拍子の音楽に合わせて身体表現できる。  |
| 拍子の学習(第1回) | [指導2]音楽CD「白鳥」(サンサーンス)に合わせた、3拍子の指揮を行う学習                                    |   |  |
|            | 音楽視聴後の教師の発問等<br>(1)「何拍子でしょう？」<br>(2)「手を振ってみましょう」                          | 生徒に以下の反応が見られた。<br>(1) 生徒Aの回答「1、2、1、2・・・」<br>(2) 生徒Bの行動:手を振るが、4拍子の動き             | 「指導1」では、音楽に合わせて身体表現できていた。しかし、3種類の音楽の違いを、拍子の違いとして理解していないことが分かる。                                     |
| 拍子の学習(第2回) | [指導]音楽CD「魔王の宮殿」(グリーク)に合わせて2拍子の表現学習<br>(注:実際は4拍子の音楽であるが、2拍子として拍子を認識して動く学習) |   |  |
|            | (1) 音楽に合わせて「1、2」の掛け声と共に前後に足踏み運動   | (1) 元気よく前後に足踏みを繰り返す。  | (1)の指導でスムーズに動いていた生徒が、(2)の指導で一旦戸惑いを見せた。しかし、繰り返すことにより、(3)の指導内容を全員ができた。また、高度な動きに見える(4)の指導内容ができる生徒もいた。 |
|            | (2) 掛け声の「2」を強調して、(1)と同様に動く(2拍子を意識できるように拍を強調)                              | (2) 掛け声と動きがかみ合わず、難しそうな動きになる。  |  |
|            | (3) 2拍目で手拍子を入れて動く   | (3) 全員が手拍子を入れることができる。   |  |
|            | (4) 2拍目で足を踏みしめて、拍を強調しながら動く  | (4) 数名の生徒のみ、踏みしめができる。   |  |
| 拍子の学習(第3回) | [指導]音楽CD「ボレロ」(ラヴェル)に合わせた、3拍子の表現学習   |   |  |
|            | (1) 音楽なしに3拍子で動く練習(1、2拍で行進、3拍目で停止の動きを前後に繰り返す)                              | (1) 約7割の生徒ができる。<br>(2) (1)での練習よりも音楽のテンポが遅いため、初めのうち動きがだんだん速くなるが、徐々にテンポと動きが合い始める。 | 第1回の学習では3拍子の理解が見られなかったが、徐々に「1、2、止まる」の意識から、「1、2、3」の意識に変わり、「3拍子」の発言もあり、3拍子の理解が感じられた。                 |
|            | (2) 音楽に合わせて「1、2、3」の掛け声を付け、(1)と同様に動く                                       | (3) 生徒Cの回答「3拍子で歩きます」  |  |
|            | (3) 音楽に合わせた動きを考える:発問「どう動いたら良い？」   |   |  |

（事例2）生徒の観察力と模倣の様子について

ここではグループに分かれて身体表現を行う授業で見られた、生徒の反応を例としてその特徴を考察する。

この授業では音楽に合わせた様々な身体表現を、「指揮」「メロディ」「動き」の3グループに分かれて学習していた。

その学習の様子を観察する中で、「メロディ」グループに属していた生徒Dの反応が筆者の目に留まった。

指導内容と生徒Dの反応の様子を、【表2】にまとめる。

「メロディ」グループではギターとスティックを使い、チェロ演奏の仕草を表現する活動を行った。グループ担当のSTが順番に生徒と向かい合い、その仕草を指導していた。

生徒DがSTから指導を受けている間、生徒Dの視界にはSTしか見えておらず、生徒Dはチェロ演奏の仕草を真剣な表情で行っていた。しかしSTが他の生徒への指導のために移動したところ、生徒Dの視界に離れた場所で練習を行う「指揮」グループの様子が入ってきた。すると生徒Dはすぐに明るい表情になり、「指揮」グループと同じ動きを始めた。その後、再びSTが視界に入ると（視界を遮ると）、すぐにチェロ演奏の動きに戻った。

これらの観察内容から、生徒Dの見えるものへの興味や関心の高さ、動きを観察する能力や動きを模倣する能力の高さが分かった。

【表2】生徒の観察力と模倣の様子

| 指導内容  | 生徒の反応  | 分析等  |
|---|--|--|
| [学習内容]グループに分かれて、音楽CD「白鳥」(グリーク)に合わせた身体表現を行う学習  |  |  |
| 「指揮」「メロディ」「動き」の3グループに分かれて活動する<br>「指揮」: 拍子に合わせて手を振る<br>「メロディ」: ギターとスティックを使ってチェロの弾き真似をする<br>「動き」: 布を使って白鳥の動きを表現する | ※ 「メロディ」グループの生徒Dに注目した。<br>STと生徒が向き合って弾き真似を練習。STが他の生徒の指導に移動。視界に入った「指揮」グループの動きを模倣。STが視界に戻ると、弾き真似を再開。 | 生徒Dは、目の前のSTの動きや興味を引かれる「指揮」グループの動きを観察し、その動きを即座に理解し、動きの模倣ができる。 |

（事例3）映像付鑑賞教材と記憶、知識との結び付きについて

ここでは映像付鑑賞教材を使った鑑賞授業で見られた、生徒の反応を例としてその特徴を考察する。

この授業では映像付鑑賞教材を使用し、標題と音楽の結び付きを知り、映像から音楽のイメージを感じるための学習を行った。

その学習の様子を観察する中で、映像に対する生徒Fの反応が筆者の目に留まった。指導内容と生徒Fの反応の様子を、【表3】にまとめる。

鑑賞教材の映像には、水面に浮かぶ白鳥の姿が映されていた。その姿は穏やか

であり、白鳥の鳴く姿も、羽ばたく姿も映り込んでいない。白鳥の様子についての教師の問い掛けに対し、他の生徒が「泳いでいる」と答える中、生徒Fは「泳いでいる」「羽広げた」「口開けた」と映像にはない答えを繰り返していた。

これらの観察内容から、生徒の映像への興味や関心の高さ、映像と自身の記憶とを結び付ける能力があることが分かった。

【表3】映像付鑑賞教材と記憶、知識との結び付き

| 指導内容  | 生徒の反応   | 分析等  |
|---|---|--|
| [学習内容]映像付鑑賞教材を使用した、「白鳥」(サンサーンス)の音楽の特徴とイメージの学習活動 |   |  |
| (1) 映像付教材での鑑賞(チェロ演奏の様子と水面に浮かぶ白鳥の映像による)          | (1) 数名の生徒がテレビ画面に近づき、全ての生徒が映像に注目する。                      | (2) 映像への興味と関心が高く、集中して鑑賞している。   |
| (2) 映像鑑賞後の発問「白鳥は何をしているでしょう?」                    | (2) 生徒の回答<br>・ 生徒E「泳いでいる」<br>・ 生徒F「池、泳いでいる、羽、広げた、口、開けた」 | (2) 音楽と白鳥の映像を鑑賞し、ゆったりとした音楽的な動きを学ばせる指導内容。映像中の白鳥に動きがなく、水面に浮いているだけであったが、生徒の発言は映像の内容と異なり、その内容から映像を解して記憶や知識(水面下で足を動かして泳ぐ、翼を羽ばたかせて飛ぶ、鳴く等)とがイメージとして表れ、発言と結び付いたと考えられる。 |

#### (事例4) 振り付け創作活動での様子について

授業観察の中で歌唱活動は歌に振りをつけて行われることが多く、生徒も喜んでその活動を行っていた。

振り付けの創作は生徒全員で考え、歌詞の言葉に合った動きのアイデアを出し合い、良い動きが出るとすぐに全員が覚え、踊りながら歌っていた。

創作活動中は全員が生き生きと参加し、曲を通すと複雑に思える動きでも、その流れを全員がすぐに覚え、歌唱活動を行った。しかし自分の動きが採用されない場合、最後まで自分の動きを続ける生徒も見られた。

これらの観察内容から、多くの生徒に振り付け創作に対する豊かな創造性があることが分かった。

しかし身体表現活動でも見られたが、興味のわかない内容や題材(曲)の場合、最後まで無反応を通し、他の生徒が活動していても動かない生徒がいることや、逆に興味のわく内容や題材(曲)でも、自分の好みと活動内容が異なると、最後まで自分の好みを通す生徒がいる等、生徒の興味がわくように誘導していく必要

性があることが分かった。

#### （事例5）お互いを認め、誉めあう様子について

授業観察の中で、「誰が上手だったか」と教師が問いかける場面が度々あった。ほとんどの場合、教師が生徒の名前を挙げてみても数名の生徒が反応を示すのみであった。

しかし時として、多数の生徒が発問に反応し、互いに誉めあう場面があった。

特に「(事例1)」で挙げた「2拍子の足踏み運動」のような、単純な学習活動の後に、教師が発問すると多数の生徒に反応が見られた。

これらの観察内容から、複雑な学習活動内容では、生徒が気乗りしない様子で反応を示さないが、単純な学習活動内容では、多数の生徒が余裕を感じ、授業での会話に参加し、他の生徒の活動に目を向けることができ、互いに誉めあえることが分かった。

#### （事例6）盲学校の音楽授業の様子について

盲学校では歌唱と合奏の授業を観察した。

歌唱では、児童6名による斉唱が行われた。また合奏では、一度階名で歌唱した後、鍵盤ハーモニカ、リコーダー、打楽器の3グループに分かれて練習し、最後に合奏を行った。

歌唱は6名の歌声とは思えない声量であった。

合奏は、2グループを組み合わせ、その組み合わせを変えながら合奏練習をした後、全体の合奏を数回行った。生徒はそれまでの授業で、階名での歌唱とそれぞれの楽器の練習を行ってきた。この日行った合奏は児童にとって初めての合奏であった。その演奏は初めて合わせたとは思えない、よくそろった演奏ができていた。

それぞれの活動の後に、児童の感想が述べられた。

歌唱については「『ラララ』をもっとはっきりと歌いましょう」「口を開いて歌いましょう」等、歌唱に対する修正意見がはっきりと述べられていた。

合奏では「ハーモニカでのシの指とドの指が小指だから、移動を早くするのが難しかった」等反省の意見もあったが、「みんなで合わせてきれいになったので良かった」「みんなで合わせて上手だったのできれいだった」等の感想が述べられた。

これらの観察内容から、盲学校の児童は自分の演奏を他の児童の演奏に合わせる能力、そのための音に対するすばやい反応、また周りの音を聞き取る能力に優れていることが分かった。

歌唱での歌声の大きさについても、自分が歌っている声への関心よりも、周りの児童の歌声への意識が勝っている現われと考えられた。

### III まとめ

これまでの観察内容の考察を受け、音楽授業に於ける特別支援学校並びに盲学

校の生徒や児童に見られ、さらに伸ばしたい能力と指導上の留意点を以下にまとめる。

(1) 生徒及び児童に見られ、さらに伸ばせる能力

- 観察力と模倣の能力（特別支援学校）
- 音楽と映像の刺激を、知識と想像に結び付ける能力（特別支援学校）
- 音に対するすばやい反応、音を聞く能力（盲学校）
- 言葉から導く想像力（共通）
- 自分の好みや良いものを選択する能力（共通）
- 仲間と知識や意識を共有できる能力（共通）
- お互いを客観視できる能力（共通）
- お互いに誉めあえる能力（共通）

(2) 指導実践上の留意点

- 興味や関心を持てる題材及び教材の必要性（共通）
- 単純で明快な筋道の立った指導内容の必要性（共通）
- 主たる教員と補助教員が、生徒及び児童が能力を発揮した瞬間を見逃さずに、生徒及び児童の能力を次の授業に繋げられる、ゆとりの持てる指導教材の必要性（共通）
- 生徒及び児童が集中できる指導の間合い（共通）
- 生徒及び児童が集中できる環境（共通）

以上の内容を基に、今後は特別支援学校並びに盲学校において、知的障害の度合いや情緒の安定の違いを越え、共通する様々な能力を伸ばせる内容の音楽鑑賞プログラムを研究し、実演による鑑賞授業の試行を行う計画である。

註

- (1) 長崎大学附属養護学校（現附属特別支援学校）中学部では、第1学年から第3学年までの生徒18名の合同で、藤田美穂子教諭と5名のST教諭により、音楽授業が行われていた。
- (2) 長崎県立盲学校幼小部では、幼児2名、第1学年から第6学年までの児童9名、合計11名の合同で、牟田秀子教諭を始めとする6名の教諭により、音楽授業が行われている。授業観察では、欠席等のため出席児童数9名であり、歌唱は6名、合奏は9名での授業であった。